

信 行 要 文 ②

第十三回 法華講夏期講習会 第二期

（平成二十八年五月二十九日）

皆さん、おはようございます。

本年度の法華講夏期講習会の第二期に当たり、お時間を頂いて、テキストに従ってお話をしていきます。

実は前回、三番目の『三大秘法抄』まで講義をしたのですが、途中で時間がなくなってしまい、その初めのところだけで終わってしまったのであります。

したがいまして本日は、三番目の『三大秘法抄』の初めからお話をしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3 三大秘法稟承事

法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給ひて候は、此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給へばなり。秘すべし秘すべし。（御書一五九五頁一八行目）

この御文は、まさしく三大秘法こそが法華經の根源の法体であることを明かされております。

つまり、世間では身延流の考え方で、まず一代諸經があり、その一代諸經の内容をまとめたのが法華經で、さらにその法華經をまとめたのがお題目である、と考えているのであります。

しかし、これは全くの間違いなのです。元々、妙法蓮華經という本源の法があり、それが法華經に開かれ、そして、その法華經が開かれて一代諸經になっていくのであります。だから、考え方が全く違うのです。この妙法というのは、言うなれば三大秘法のことです。ですから、まさに三大秘法が法華經の根源の法であると、ここでおっしゃっておられるのであります。

皆さんも御承知の通り、三大秘法とは本門の本尊と本門の戒壇と本門の題目のことでありますが、大聖人様はこの三大秘法こそ、まさに大聖人様の御出世の本懐であり、また大聖人様の宗旨であると仰せであります。

この三大秘法については様々な角度から論じられておりますけれども、その第一として、三大秘法は仏教の基本である戒かいじょう定え慧の三学に当たると説かれます。

そもそも戒定慧の三学とは、仏道を修行する者が必ず修学しなければならない基本的なものです。そのうち、一番目の「戒」は、五戒、十戒、二百五十戒等の戒律のことで、

これらは善を修めて悪を防ぐという意味があります。そして二番目の「定」は、心身の乱れを静め、安定した境地に立つことを言います。さらに最後の「慧」は、真理を証得する智慧を言うのであります。

この戒定慧の三学について、大聖人様は『御義口伝』に、

「戒定慧の三学、寿量品の事の三大秘法是なり」（御書 一七七三㊦）

と、末法において、戒定慧の三学は三大秘法であると御教示あそばされております。

また、この三大秘法につきましては開合ということがありまして、総本山第二十六世日寛上人は『依義判文抄』に、三大秘法の開合について、

「問う、若し爾らば三大秘法開合の相如何。

答う、実には是れ一大秘法なり。一大秘法とは即ち本門の本尊なり。此の本尊所住の処を名づけて本門の戒壇と為し、此の本尊を信じて妙法を唱うるを名づけて本門の題目と為すなり。故に分ちて三大秘法と為すなり。又本尊に人有り法有り、戒壇に義有り事有り、題目に信有り行有り、故に開して六義と成る。此の六義散じて八万宝蔵と成る。例せば高僧伝に『一心は万法の総体なり。分ちて戒定慧と為し、開して六度と為り、散じて万行と為る』と云うが如し。当に知るべし、本尊は万法の総体なり、故に之れを合する則んば八万宝蔵は但六義と成る。亦此の六義を合すれば則ち但三大秘法と成り、亦三大秘法を合すれば則ち但一大秘法の本門の本尊と成るなり。故に本門戒壇の本尊を亦是三大秘法総在の本尊と名づくるなり」（六卷抄 八二㊦）と仰せであります。

つまり、三大秘法を合すれば一大秘法になり、その一大秘法とは本門の本尊なのです。そして、この一大秘法の本門の本尊を開くと三大秘法になり、この三大秘法をさらに開くと、六大秘法になるとおっしゃっているのです。すなわち、三大秘法のそれぞれが二つずつに開かれて、本門の本尊が人の本尊と法の本尊に分かれ、戒壇は事と義に、それから題目は信と行に分かれるというように、一大秘法が三大秘法になり、三大秘法が六大秘法になり、この六大秘法が、さらにあらゆる教え、八万四千の法門に開かれていくのであります。

だから、すべての教えは本門の本尊、つまり一切衆生を成仏に導く本門戒壇の大御本尊が中心であるということをおっしゃっているのであります。

そこで今、三大秘法について御書を拝読いたしますと、まず『四条金吾殿御返事』には、

「今日蓮が弘通する法門はせばきやうなれどもはなはだふかし。其の故は彼の天台伝教等の所弘の法よりは一重立ち入りたる故なり。本門寿量品の三大事とは是なり」

（御書 五九七㊦）

と大聖人様がおっしゃっており、この「本門寿量品の三大事」とは何かと言え、三大秘法のことです。これは『三大秘法抄』にも、

「此の三大秘法は二千余年の当初、地涌千界の上首として、日蓮慥かに教主大覺世尊より口決せし相承なり。今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に介爾計りの相違なき、色も替はらぬ寿量品の事の三大事なり」(同 一五九五)

と仰せになっておりますことから、三大秘法とは「寿量品の事の三大事」であることは明らかであります。

次に『義浄房御書』には、

「寿量品の自我偈に云はく『一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず』云云。日蓮が己心の仏果を此の文に依って顕はすなり。其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此の経文なり、秘すべし秘すべし」(同 六六九)と、三大秘法についてお述べになっております。

また『法華行者値難事』には、

「竜樹・天親は共に千部の論師なり。但権大乘を申べて法華経をば心に存して口に吐きたまはず此に口伝有り。天台・伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩・戒壇・南無妙法蓮華経の五字と、之を残したまふ」(同 七二〇)

とおっしゃっており、これは、三大秘法はあくまでも大聖人様がお示しあそばされるところであるという意味です。

そして『法華取要抄』には、

「問うて云はく、如来滅後二千余年に竜樹・天親・天台・伝教の残したまへる所の秘法何物そや。答へて曰く、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり」(同 七三六)と、末代まで秘沈せられた秘法こそ、この三大秘法であるとおっしゃっております。

次に『報恩抄』には、

「問うて云はく、天台伝教の弘通し給はざる正法ありや。答ふ、有り。求めて云はく、何物そや。答へて云はく、三つあり、末法のために仏留め置き給ふ。迦葉・阿難等、馬鳴・竜樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求めて云はく、其の形貌如何。答へて云はく、一つには日本乃一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦・多宝、外の諸仏並びに上行等の四菩薩脇士となるべし。二つには本門の戒壇。三つには日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきはらず一同に他事をすて、南無妙法蓮華経と唱ふべし」(同 一〇三六)

と仰せになっております。

このなかで「教主釈尊」とおっしゃっておりますが、これはインド出現の釈尊を指しているわけではありません。この「教主釈尊」という言葉には御法門の上から言って非常に深い意味がありまして、分類しますと六つの意味が含まれているのであります。つまり、同じ教主釈尊という言葉のなかに、藏教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊、法華経迹門の釈尊、法華経本門の釈尊、本門寿量品文底の釈尊というように、六種の釈尊が存するのです。それを単純に「なんだ、教主釈尊と示されているのだから、やっぱりお

釈迦様ではないか」と考え違いをしているのが他門の人達です。皆さんは解っているでしょうから、あえて言うまでもないことでもありますけれども、この「教主釈尊」という言葉は、六種の解釈ができるのです。

そして大聖人様が、この文で「教主釈尊」とおっしゃっている意味は、まさしく法華経本門寿量品文底下種の教主釈尊、つまり末法下種の御本仏である宗祖日蓮大聖人様のことを述べられているのであります。

さらに『御義口伝』を拝しますと、

「此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱是なり。如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。今日蓮等の類の意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華経と云ふなり。寿量品の事の三大事とは是なり」(同 一七六五頁)

とお述べになっております。

こういった御文から拝しまして、説くところの教主釈尊にしても、大聖人様はきちんとその意味を使い分けられているのでありますから、それを我々はしっかりと拝読していかなければならないのであります。

以上、三大秘法の全体について申し述べた次第であります。

次に、三大秘法の第一である「本門の本尊」について申し上げますと、そもそも本尊とは、まず「根本尊崇」という意義があります。それから「本有尊形」とか「本来尊重」という意義もあるのでありますが、本門の本尊とは、まさしく三大秘法の随一にして信仰の根本対象であります。

ですから、大聖人様は『本尊問答抄』におきまして、

「本尊とは勝れたるを用ふべし」(同 一二七五頁)

と、一切に勝れた本尊を選別することの重要性を説かれております。

そもそも、末法に御出現せられた日蓮大聖人様は、久遠元初の御本仏としての御内証を一幅の大漫荼羅本尊として御凶顕あそばされました。この大漫荼羅こそ、あらゆる人々を根本的に救う力を具えた最勝・最尊の本尊でありまして、これを本門の本尊と言うのであります。

先程の日寛上人の御指南にもありましたけれども、この本門の本尊には、人と法の二つの義が具わっています。大聖人様は『草木成仏口決』に、

「一念三千の法門をふりすゝぎたてたるは大漫荼羅なり」(同 五二三頁)

とお示しあそばされておりますが、大聖人様が御本仏としての御内証の事の一念三千の法を顕されたのが、まさしく大漫荼羅本尊であります。これは言うなれば、人即法の本尊であります。

また『御義口伝』に、

「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」（同 一七七三頁）

とも仰せられておりますが、まさにこれは、久遠の法体を御所持あそばされる大聖人様の当体こそ御本尊そのものである、という意義があるのであります。つまり、この関係は、あくまでも人法一箇、人法体一ということであります。

そして、大聖人様は多くの漫荼羅御本尊を躓されておりますけれども、なかでも弘安二（一二七九）年十月十二日御図頭の大御本尊こそ、究竟^{くきょう}中の究竟でありまして、まさにこの御本尊こそが大聖人様出世の本懐であります。

このことは『聖人御難事』のなかに、

「去ぬる建長五年^{太歳丑}四月二十八日に、安房国長狭郡^{あ わのくにながさのこおり}の内、東条の郷、今は郡なり。天照太神の御^みくりや、右大将家の立て始め給ひし日本第二の御^みくりや、今は日本第一なり。此の郡の内清澄寺^{せいしようじ}と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年、弘安二年^{うま}なり。仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に、出世の本懐を遂げ給ふ。其の中の大難申す計りなし。先々に申すがごとし。余は二十七年なり」（同 一三九六頁）

とおっしゃっております。

この御本尊が「本門戒壇の大御本尊」と称し奉る、総本山大石寺に厳護せられている御本尊様であります。まさにこの御本尊様は三大秘法の意義を具え、全世界の民衆はこの御本尊によって、初めて真の即身成仏の大利益を受けることができるのです。

これが、三大秘法のなかの、本門の本尊であります。

次に「本門の戒壇」について申し上げますと、本門の戒壇とは、本門の本尊を安置して仏道修行に励む、その処を言うのであります。

戒とは、非道を防ぎ、悪行を止めるという意味がありまして、戒壇とは、仏様の教えを信じ行ずる者が、戒を受ける場所を指します。

この戒壇は、時代を追って、小乗の戒壇、そして大乘の戒壇というように^{へんせん}変遷があり、その存在意義も、それぞれの時代によって様々に変わってきております。しかし、これはあくまでも釈尊の熟脱の仏法における変遷であります。

末法今日におきましては、大聖人様御建立の本門の本尊を安置する場所がそのまま戒壇でありまして、これを本門の戒壇と称するものであります。つまり、御本尊が安置されている処が本門の戒壇なのです。

これには、また事と義という二つの立て分けが存しております。事の戒壇というのは、大聖人様の出世の本懐である本門戒壇の大御本尊の住処であります。また、義の戒壇とは、その意義が事の戒壇に通ずるという意味で、各末寺や家庭に下付された御本尊様の所住の処を、義の戒壇と言うのであります。

大聖人様は『三大秘法抄』に、

「戒壇とは、王法^{みょう}仏法に冥^{みょう}じ、仏法王法^{がっ}に合して、王臣一同に本門の三秘密の法を

持ちて、有徳王・覺徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時（中略）靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者か。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是なり」（同 一五九五〇）

と仰せられています。その戒壇建立の場所となる「最勝の地」については、『日蓮一期弘法付嘱書』に、

「富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり」（同 一六七五〇）

と、甚深の意をおっしゃっているのであります。

次に「本門の題目」について申し上げますと、本門の題目とは、本門の本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱えることを言います。

この南無妙法蓮華經は、法華經の各品に冠せられた、いわゆる妙法蓮華經の經題とは違い、寿量品の文底に秘沈された独一本門の本法であり、久遠元初の本仏の宝号でもあります。

大聖人様は本門の題目について『本因妙抄』に、

「久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず、直達正觀・事行の一念三千の南無妙法蓮華經是なり」（同 一六八四〇）

と、この題目は御本仏大聖人様自らが実際に行じられた事行の題目であるとおっしゃっているのです。

この本門の題目は信と行の二つに立て分けられるのでありますが、信とは、本門戒壇の大御本尊を絶対無二と信じ奉ることでありまして、行とは、その信心をもって唱題し、実践行動することを言います。

たとえ信ずる心があっても、実際の行がなければ、功德を成ずることはできません。また、唱題等の修行があっても、その根底に信心がなければ成仏はいたしません。このことを大聖人様は『法蓮抄』のなかで、

「信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を企つるがごとし」（同 八一四〇）

と、信行具足の題目でなければならぬと御教示あそばされているのであります。

さらに『三大秘法抄』には、

「題目とは二意有り（中略）像法には南岳・天台等は南無妙法蓮華經と唱へ給ひて、自行の為にして広く化他の為に説かず。是理行の題目なり。末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり」（同 一五九四〇）

と、釈尊滅後の正法・像法時代の様々な諸師が唱えたところの題目は自身のみの行に限られた、言わば觀念・觀法による理行の題目であり、大聖人様の唱え出だされた事行の題目こそが、一切衆生を救済しうる、まさに自行と化他にわたる題目であると明かされておるのであります。

したがって私達は、本門戒壇の大御本尊を唯一絶対の対境とし、信の一念をもって自行化他にわたる本門の題目を唱えていくことが、最も大切であります。これが、本門の題目であります。

この三大秘法は、つづめれば一大秘法に収まり、この一大秘法の本門の本尊が根本であります。そして、ここから三大秘法、六大秘法、そしてあらゆる万法の経教につながっていくのであります。

ですから、私達が登山参詣して、この本門戒壇の大御本尊に妙法を唱える功德というのは、まことに計り知れないものがあるのです。つまり、皆さん方がこうして講習会に参加して御開扉を受ける功德は、私達が想像するよりも、はるかに大きなものがあるのであります。やはり、この信心の姿こそが、私達にとって大事であると思います。

次は四番目です。

4 本因妙抄

文に云はく「理は造作に非ず故に天真と曰ひ、証智円明なるが故に独朗と云ふ」云云。釈の意は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の本迹二門を迹と為し、久遠名字の本門を本と為す。信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華経と唱へ奉れば凡身即ち仏身なり。是を天真独朗の即身成仏と名づく。(御書一六七九〇一行目)

これは非常に大事な御文であります。

この『本因妙抄』は弘安五(一二八二)年十月十一日、大聖人様が池上におきまして御入滅になる二日前に、日興上人に譲られたところの書であります。宗門におきましては『百六箇抄』と共に「血脈抄」と呼ばれている相伝書であります。

古い書物を見ますと「血脈抄に云はく…」というように、ところどころに出てきますが、その場合は、この『本因妙抄』か、あるいは『百六箇抄』であります。

この書が「血脈抄」と呼ばれるその意味は、この御文の標題に、

「法華本門宗血脈相承事」(御書 一六七六〇)

とありまして、また最後の所にも、

「本門立行の血脈之を注す。秘すべし秘すべし」(同 一六八四〇)

と述べられているところにあり、古来、宗門にとって大事な御書として扱われているのであります。

この御書は最初に、伝教大師が入唐中の貞元二十一(八〇五)年五月三日に仏隴寺の行満から相伝した『三大章疏七面七重口決』について説明されております。この仏隴寺というのは天台宗の根本道場の一つで、仏隴道場とも呼ばれ、国清寺と並んで有名な寺であります。

三大章疏というのは、天台大師の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の三つで、三大部とも言いますが、それぞれについて七面ずつの口決を受けたもので、三大部相互の同異点を「一同十異・四同六異」（御書一六八二）をもって顕されております。

次に、大聖人様と天台大師の法門の勝劣を「二十四番勝劣」（同）として明かされて、天台大師の理の一念三千は、大聖人様の事の一念三千に劣ることを明かされております。

さらにまた、天台大師の勝しょうとする法門は、あくまでも教相、文上の範囲で定められたものでありまして、まさに一往いちおうの勝に過ぎない。再往さいおう、天台の勝は、大聖人様の寿量品文底下種の仏法から見れば、劣になることが示されているのであります。

最後に、寿量品文底下種の大法の、大事の秘法は何かと言え、それはまさに事の一念三千の南無妙法蓮華経であるということを、ずっと述べられているのであります。

ちなみに、今言いました「二十四番勝劣」というのは、

「一に彼のか本門は我が迹門」（御書 一六八二）

とあります。文中の「彼」とは天台、「我」とは大聖人様のことで、天台の法門は大聖人様の仏法から見ると、まだまだ及ばないものであり、迹門に過ぎないという意味です。

「二に彼の勝は此の劣」（同）

とは、天台で勝とする法門も、大聖人様のお立場から言うならば、まだ劣であるということなのです。

「三に彼の深義じんぎは予が浅義。四に彼の深理は此の浅理」（同）

は、天台で言う甚深の義理は、大聖人様の仏法から言うならば、まだ浅い義理であるとおっしゃっているのです。

「五に彼の極位ごくいは此の浅位」（同）

も同じような意味でありまして、天台の極位つまり最上級の位は、大聖人様の仏法から言うならば、まだまだ浅い位であるとおっしゃっているのです。

「六に彼の極果は此の初心」（同）

とあるなかの「極果」とは、最高の悟りのことです。ですから、天台で言う最高の悟りは、大聖人様の仏法から見れば、まだまだ初心に過ぎないということです。

「七に彼の観心は此の教相」（同）

とは、天台で言う観心の法門は、大聖人様の仏法から言うならば、まだまだ教相であるとおっしゃっているのです。

「八に彼は台星たいしょうの国に出生し、此は日本国これに出生す」（同）

とおっしゃっております。「台星」とは中国のことで、天台は星の国に出生したのに対し、大聖人様は「日の出ずる国」である日本国に出生せられた、ということです。なぜならば、末法の御本仏なるが故に、このようにおっしゃっているのです。

「九に彼は薬王此は上行」（同）

とありますのは、天台は 迹化^{しゃっけ}の菩薩である薬王菩薩の再誕なのです。それに対して、大聖人様は本化地涌^{ほんげ}の菩薩の上首である上行菩薩の再誕であり、そこに勝劣があるのであります。

「十に彼は解了^{げりょう}の機^りを利し、此は愚悪^{やく}の機を益す」(同^ぎ)

との仰せは、天台は真理を觀じて理解することのできる「解了の機」つまり上根上機の衆生を救った。それに対して大聖人様は、妙法をもって末法^{げこんげき}の下根下機の衆生を救済するということです。

機根には上根上機・中根中機・下根下機の三つがあり、これを二つに括れば上根上機と下根下機になるのです。末法より前の衆生は、上根上機と中根中機の方々であり、これらは天台の教えで救われるのです。しかし、末法の下根下機の一切衆生は、まさに御本仏大聖人様の教えでなければ救えないのであります。

これは非常に大事なことでありまして、末法の本末有善^{うぜん}と言われる衆生には、像法過時の教えをいくら説いても、なんの利益もないのであり、まさに大聖人様の久遠元初の本法たる南無妙法蓮華經をもってしか救えないのです。つまり、末法には末法の衆生を導く、御本仏大聖人様の久遠の本法があるのであり、この久遠の本法を説いてこそ、本末有善の末代の衆生は成仏することができる、とおっしゃっているのです。

次は、

「十一に彼の弘通は台星所居^{しょうご}の高嶺^{こうれい}なり、此の弘經は日王能住^{にちおう}の高峰^{こうほう}なり」(同^ぎ)とおっしゃっております。この「台星所居の高嶺」というのは中国の法華迹門の戒壇がある天台山のことで、それに対して「日王能住の高峰」は大聖人様の仏法を譬えているのであります。すなわち、中国の天台宗を星になぞらえて「台星」と称し、天台の法華迹門の義を台星が住する高嶺に譬えたのに対しまして、大聖人様の法華本門の義を「日王」すなわち太陽であるとし、さらに「所居」に対する「能住」と称して、本迹の勝劣を顕されているのであります。

この、所居と能住の關係について少し申し上げますと、所化と能化という言葉があります。皆さんもお寺にいる若い僧侶のことを「所化さん」と呼ぶことがあるかと思いますが、所化とは化^けされる者という意味で、教化される立場を言う言葉です。それに対して、能化とは能^よく化す者、すなわち教化する立場を言い、学校で言えば、能化は教師、所化は生徒という關係になります。同様に、所居とは住まわれる場所を言い、能住とは住む人を言うのです。

次は、

「十二に彼は上機に教へ、此は下機^{おし}に訓ゆ」(同^ぎ)

とあります。これはどういうことかと言いますと、天台は像法時代における上根上機の衆生を救われたのでありますが、その上根上機を救う法では、末法の下根下機の衆生は救えないのであります。そこで大聖人様の御出現があつて、大聖人様は末法の五濁に染

まった下根下機の衆生を、南無妙法蓮華經の根源の本法をもってお救いあそばされる。ですから、大聖人様の仏法でなければならない、とおっしゃっているのです。

「十三に彼は一部を以て本尊と為し、此は七字を以て本尊と為す」(同)

とは、これは御本尊のことですね。大聖人様は、まさに妙法七字の御本尊をもって衆生を救うということでもあります。

「十四に彼は相待開会を以て表と為し、此は絶待開会を以て表と為す」(同)

と、このようにおっしゃっております。

「相待開会」というのは、そとごん権などの相対的な諸法を所開として、絶対の妙法を能開として開会することです。これによって方便を除いて真実に入らせ、粗末な教えであるこ、あるいは仮りの教えであるごん権は開会されて妙法となりましたけれども、なお開会するもの、すなわち能開と、開会されるもの、すなわち所開の相対がある故に相待開会と言うのであります。

これを当文には「彼は相待開会を以て表と為し」とおっしゃって、天台の法門は絶対妙を立てるようでもありますけれども、なお相対を表とした絶対であるということを示されているのであります。

また「絶待開会」というのは、諸法を開会して唯一の妙法の体内に包摂することであり、相待開会に対する語であります。妙とこ、善と悪などの、ひし彼此相対、対立、あるいは差別をすべて絶するから「絶待」と言うのです。つまり、当文には「此は絶待開会を以て表と為す」とありますように、末法の本門寿量品文底下種の仏法は、この南無妙法蓮華經の一法による絶待開会を第一義とするのであります。すなわち、一切の相対を絶して、この文底下種の南無妙法蓮華經の一法とする。これとこれとを比べて、これが勝れているというような意味ではなく、第一義、絶対的な教えが妙法であります。

つまり、これはどういうことかということ、法華經以外のすべての教えは、妙法から出てきた教えなのです。ですから、本未有善の末法の衆生は相対的な教えでは救われないのであり、絶対的な妙法蓮華經の本法でなければ成仏することは絶対にできないのであります。

「十五に彼は熟脱、此は下種」(同)

とあります。これは詳しく申し上げなくても解りますね。

「十六に彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し、此は万機の為に南無妙法蓮華經と勧む」(同)

とあります。天台は、よざん釈尊仏法の余残の機の衆生に対し、『止観』によって真如実相を内観する修行を説きましたけれども、大聖人様は末法万機のために妙法信受、すなわち受持即観心の義を説かれたのであります。天台は結局、釈尊の教えの流れの上から法を説いたことから、どうしてもこのようになるのであります。

「十七に彼は悪口怨嫉、此は遠島流罪」(同)

とあります。天台大師は、法難に値あわれたと言われましても、ほかの者から悪口や怨嫉を受けたに過ぎないのです。けれども大聖人様は、佐渡への遠島たつのくち くびとか竜口の頸くびの座というように、本当に命懸けの、すさまじい御難に値あわれており、その違いは歴然としているのであります。

「十八に彼は一部を読誦すと 雖いえども二字を読まざるの義これ之在り、此は文々句々 悉ことごとく之を読む」(同ジ)

とあります。つまり天台は、口では法華經一部を読誦しましたが、「蓮華」の二字さえも身読していないのです。しかし大聖人様は、法華經の文々句々ことごとくを身読しました。要するに、口で読むだけでなく、「法華身読」と言いますように、法華經を身で読まれたとおっしゃっている所以であります。

大聖人様は、まさに「勸持品の二十行の偈」を身読されて、竜口の法難など、種々の法難に値あわれたのであります。この、法華經の一文一句を大聖人様が御本仏として身でお読みあそばされたところが、天台との大きな違いであります。

「十九に彼は正直の妙法の名を替へて一心三觀と名づく、有りの俣まの大法あらに非ざれば 帶たいごん權ごんの法ひに似たり、此は信ひ謗し彼此けつじょうじょう決定か成か菩提か、南無妙法蓮華經と唱へ懸く」(同ジ)

とあります。天台大師は、妙法の名を一心三觀、つまり自己の心中に空仮中の三諦を同時に觀かんずることと言い替かえて説せかれました。それに対し、大聖人様は「信謗彼此、決定して菩提を成なぜん」すなわち、信しんずる者は順縁じゆんげんによって、また誹謗する者は逆縁ぎやくげんによって、順縁であろうが逆縁であろうが両者共に必ず菩提を成なずる、つまり成仏じゆふするとして、直ちに久遠名字の妙法を説せいている、ということです。

逆縁成仏の話は、色々なところで皆さん方も聞かれておるでしょう。お經のなかにも、御書のなかにもありますよね。例えば、法華經が憎にくくて、法華經を足蹴あしげにした人がいた。その人が死んだら当然、法華經を足蹴あしげにした罪により地獄おに墮おちるのですけれども、獄卒おがいくら杖おで突おついで地獄おに墮おとそうとしても、法華經を蹴あった足だけは地獄おに墮おちていかないのです。

それはなぜか。これが、逆縁成仏なのです。世間でも「縁なき衆生は度し難し」と言いいますように、この大聖人様の仏法の縁えんに触ふれることが、とても大切なのです。だから、この法華經を足蹴あしげにした人も、それが縁えんとななって、足だけが地獄おに墮おちななかったのです。

我々の折伏せつぷくも同じです。どんな人にも、この御本尊様のすばらしさを説せき、折伏せつぷくすべきなのです。その時に反対しようが何しようが、それが必ず縁えんにななって、その人の成仏じゆふに結むすびつつくのです。今言いった、逆縁成仏ぎやくげんじゆふということが実際じつじにあるのであります。

このことは皆さん方もお寺で、指導教師あるいは幹部の方から聞きいていららっしゃると思おもいますけれども、まさにその通りなのです。ですから、折伏せつぷくを躡ちゆうちよ躡ちよしてはだめなのです。心を込めて折伏せつぷくをすれば、それが必ず縁えんになる。その時に相手の方が反対してもいいのです。「折伏せつぷくをしても、あの人は絶対に入いらないな」と思おもいながら、折伏せつぷくをして

もいいのです。それでも、折伏するところ、それが必ず縁になるのです。そこが非常に大事なのであります。

これはいつも私が申し上げていることではありますが、だいぶん前に台湾に行ったことがありまして、視察の折、総統府に行ったのです。そこで、現地の方々に色々とお手配いただきまして、総統府の偉い方と私が会うことになり、御挨拶をいただいたのです。その方と挨拶が終わって、私がまた別の方と話をしていたら、台湾の現地のメンバーがその方を折伏していたのです。私は、初めは解らなかつたのですが、私が別の方に挨拶をしている間に、現地メンバーの御婦人の方がお話をされているのです。それで、私が「何を話しているのですか」と聞いたら、折伏をしていると言うのです。

台湾は今、本当に折伏が盛んですけれども、チャンスとあらば、そのように法を説いていくのです。その時に、その人が反対しようが何をしようが、縁を結ぶことにより逆縁成仏することができるのでありますから、本当にどこでも、だれにでも、私達は折伏すべきなのです。遠慮する必要はないのです。

もちろん、チャンスというものがありますから、むやみにというわけにはいかないかも知れませんが、チャンスがあれば、しっかりと法を説いていくことが非常に大事であると思います。

次は、二十番目になります。

「二十に彼は諸宗の^{みょうぎ} 謬^{ほぼ}義を粗書き頭はすと^{いえど} 雖も未だ言説せず、此は身命を惜しまず^{ただ} 他師の邪義を^{ごうてき} 糾し三類の強敵を招く」(同^ぎ)

とあります。つまり、天台は諸宗の誤りを積極的には責めなかつたけれども、大聖人様は他師の邪義を徹底的に責めて、三類の強敵を招いたということです。

これが大事で、我々も大聖人様を見習って、今言った通り、どんな人にでも堂々と法を説くべきであります。そういったことを忘れてしまいますと、折伏の精神がどこかに飛んでしまいます。まあ、皆さん方は常々そのようになさっていらっしゃると思いますけれども、なお一層、平成三十三年を目指して頑張ってくださいと思います。

「廿一に彼は安樂^{ふげん}普賢の説相に依り、此は勸持不^{ふきょう} 輕の行相を用ゆ」(同^ぎ)

とあります。天台大師は安樂行品の「四安樂行」と普賢品の「五種の妙行」の説相により、^{しょうじゅ} 撰受・自行を表としたと言われております。それに対して、大聖人様は勸持品あるいは不輕品の行相によって、折伏・化他を用いられているのであります。勸持品もそうでありますし、あるいは不輕品もそうであります。我々は特に不輕菩薩の行相を、しっかり見習っていかなければならないと思います。

「廿二に彼は一部に勝劣を立て、此は一部を迹と伝ふ」(同^ぎ)

とあります。ここで「一部」というのは法華經一部ということで、法華經の全部という意味です。ですから、天台は法華經一部のなかで勝劣を立てましたが、大聖人様は文上の法華經一部をすべて迹とされ、本門寿量品文底をもって本とされたということであり

ます。

「廿三に彼は応仏の域を引かふ、此は寿量品の文底を用ゆ」（同[△]）とあります。天台大師は応仏昇進の仏の説いた文上の法華經に^よ拠ったのに対して、大聖人様は寿量品の文底を用いているということです。

最後であります、

「廿四に彼は応仏昇進の自受用報身の一念三千・一心三觀、此は久遠元初の自受用報身^{む さほんぬ}無作本有の妙法を直ちに唱ふ」（同[△]）

とあります。天台は応仏昇進の自受用報身を顕す一念三千・一心三觀を説いたのでありますが、これはあくまでも像法過時の教えです。それに対して、大聖人様は久遠元初の無作三身の本法たる妙法を直ちに唱えられたということであり、そこに違いがあります。

そして、

「此等の深意^{じんい}は迹化^{しゃっけ}の衆普賢^{しゅ}・文殊^{もんじゆ}・觀音・藥王等の大菩薩にも付嘱せざる所の大事なれば知らざる所の秘法なり。況んや凡師に於てをや」（同 一六八三[△]）

とあります。つまり今、述べたところの二十四番の深義は、迹化の菩薩には付嘱せざるころの秘法であって、まして凡師には付嘱しないころの秘法、非常に大事な話であるとおっしゃっております。

以上の二十四点の勝劣によって、天台の理の一念三千は劣り、大聖人様の事の一念三千が勝れるとして、天台の勝劣はあくまで教相^{はんちゆう}の範疇で定めたものであって当分の勝劣に過ぎず、大聖人様の文底下種仏法から見れば、共に劣となることを示されているのであります。

次に、テキストの御文について申し上げます。

「文に云はく「理は造作に非ず故に天真と曰ひ、証智円明なるが故に独朗と云ふ」^{ぞうさ あら てんしん い えんみょう どくろう}云云。とありますが、これは妙楽大師が天台大師の『摩訶止觀』を注釈した書である『止觀輔行伝弘決』^{ぶぎょうでんぐけつ}の文であります。

そのなかの「理は造作に非ず」とは理は造作ではないということで、「天真」とは人為ではない、あるがままの自然の相を言うのであります。つまり、一念三千の^{たい}体である妙法蓮華經は諸法の実相、本有無作の当体であって、だれかに造作されたものではなく、諸法のあるがままの姿であるということであり、

次の「証智円明」というのは、証智が円明であるという意味です。「証智」とは、別教の初地あるいは初住の菩薩が中道真実の理を証悟する正智、すなわち真実を知る智慧を言います。「円」とは完全無欠なことで、「明」とは隠れなく、あきらかな様の意でありますから、証智円明というの、真理を証得する智慧が円満にして明了なことを言うのであります。

また「独朗」とは^{ひと あきら}独り朗かに悟ることであり、これは天台の『摩訶止觀』を^{たた}讃えて

「天真独朗」と言うのであります。すなわち、この天真独朗とは作為のない、自然の天性をもって独り明らかに開悟することを言い、この無師の法とされる天真独朗の法門とは一心三観、一念三千の観念・観法のことであります。

一心三観というのは天台所立しよりゅうの観心修行の法門でありまして、衆生が日常に起こす一念の心のなかに、空仮中の三諦が円融相即して具わっていることを観ずる修行のことで、天台はこれをもって止観の正行としたのであります。

大聖人様は『立正観抄』に、

「一心三観とは所詮妙法を成就せんが為の修行の方便なり」(同 七七一㊦)

と、一心三観は末法の観心修行たりえないことを教えられております。ですから、今時末法は、文底秘沈の大法たる本門の本尊に対して唱題することが正行となるのです。

さて、今言った「理は造作に非ず故に天真と曰ひ、証智円明なるが故に独朗と云ふ」の文について「釈の意は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の本迹二門を迹と為し、久遠名字の本門を本と為す」と示されております。

すなわち「天真独朗」について釈された妙楽大師の言葉を引いたあと、大聖人様は、口で唱えるお題目の理は、だれかに造作されたものではなく、末法においては文上熟脱の本迹二門をとし、久遠名字の妙法を本とするものであるとおっしゃっているのです。

よって『寿量品文底大事』には、

「下種の法華経は久遠名字の妙法なり。然るを日蓮聖人本因妙の修行の手本として、妙法蓮華経の五字を余行に亘さずして下種し給ふ者なり。一毫未断の我等末代嬰兒の一切衆生、妙法の名を聞きて持つ処に即身成仏を遂ぐるなり。誠に我等が為に有り難き法相なり」(同 一七〇七㊦)

と、末法下種の正体たる久遠名字の妙法を受持信行する功德の、いかに甚大なるかを示され、もって、この末法我ら衆生の妙法信受を勧められております。

この「久遠名字の妙法」というのは『三世諸仏総勘文教相廢立』に、

「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開きたまひき」(同 一四一九㊦)

と仰せであります。私が久遠元初において名字凡夫の位で即座開悟せられた法を、久遠名字の妙法と言ひ、また下種の本因妙とも言ひます。この久遠名字の妙法こそが、まさしく末法下種の正体、事の一念三千、文底甚深の大事、大聖人弘通の最要にして正中の正、妙中の妙、要中の要であることを明かされているのであります。

この久遠名字本因妙の教主釈尊の本地を顕されたのが、末法の御本仏日蓮大聖人様であります。故に『百六箇抄』には、

「我が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり。其の教主は某なり」(同 一六九五㊦)

と述べられているのであります。

次に「^{ごうじょう}信心強盛にして^{ただ}唯余念無く南無妙法蓮華經と唱へ奉れば凡身即ち^{これ}仏身なり。是を天真独朗の即身成仏と名づく」と仰せであります。このなかの「凡身即ち仏身」とは、凡身とは凡夫の身のことです。その凡夫の身が、ただ余念なく南無妙法蓮華經と唱え奉ることによって仏身と顕れる、すなわち即身成仏するという意味であります。

伝教大師は『法華秀句』のなかに、

「能化の童女、^{りやつこう}歴劫の行無く、所化の衆生、^{とも}歴劫の行無し。能化所化俱に歴劫無し、^{きょうりき}妙法の経力を以て即身に成仏す」

と述べられておりますように、妙法蓮華經の力によって、衆生が凡身を改めることなく、その身そのままに仏に成ることを即身成仏と言うのです。

しかし、爾前經では^{かいてん}改転の成仏が説かれ、改転の成仏というのは、例えば女人が女身を改め、男子となって成仏することです。法華經以前の教えでは女人不成仏ということが言われておりました。だから、女人は一度、男に生まれ変わり、それから成仏するとされておったのです。あるいは歴劫修行が必要とされ、この歴劫というのは、爾前の諸經の菩薩や二乗は長い期間にわたって六波羅蜜などの修行をして、ようやく仏と成ると説かれてきたのであります。

これに対して法華經では、妙法蓮華經の^{くりき}功力によって、凡夫の身そのまま、当体を改めることなく即身成仏することができると説かれているのです。ここに、法華經の即身成仏と、爾前經の改転の成仏との大きな違いがあるのであります。

だから、一切衆生はことごとく、この妙法によってのみ、真の成仏ができるという意味が存するのです。故に、大聖人様は『開目抄』に、

「^{もろもろ}諸の大乗經には、成仏往生をゆるすやうなれども、^{あるい}或は改転の成仏にして、一念三千の成仏にあらざれば、^{うみょう}有名無実の成仏往生なり」(御書 五六三ノ)

とおっしゃっておられるのであります。

先程言いました通り、「改転の成仏」というのは即身成仏に対する言葉でありますから、爾前經では女の方が女のままでだめなのです。男子に生まれ変わって成仏と言うのです。だから、爾前經を信仰してはだめなのです。

またこのように、生まれ変わって成仏すると簡単に言いますが、これには相当な時間がかかります。一回や二回、生まれ変わるぐらいではだめですから、とても長い時間がかかるのです。爾前經の成仏というのは、そういう成仏なのです。

しかし、法華經は違います。法華經は、その身そのまま、女人は女人のままで即身成仏する。また悪人も、善人に生まれ変わるのではなく、悪人が悪人のままで成仏するのです。

ここにある「一念三千の成仏」とは、一念三千の法門が説かれている法華經による成仏のことです。今申し上げました通り、爾前經では十界に差別があり、とりわけ二乗に

対しては永不成仏ようと言われ、悪人あるいは女人も不成仏と説かれてきたのです。

しかし、この法華経では、舍利弗しゃりほつなどの二乗も、あるいは地獄界だいぼだつたの提婆達多も、あるいは畜生界で女人の竜女も、成仏の証明がなされ、十界かいじょう皆成と言いますように、十界すべての衆生の成仏が、一念三千の妙理によって明かされました。

また、法華経の即身成仏についても、迹門は理、本門は事じという違いがあり、本門の事の即身成仏こそが、当位即妙とういそくみょう、本有不改ほんぬの成仏なのであります。

当位即妙というのは、当位とはそのままの位、妙は妙覚のことでありまして、九界の凡夫がそのままの位で成仏がかなうことであります。また本有不改というのは、当位即妙と同じ意でありまして、凡夫は凡夫のまま、各自本来の位を改めずに、本有無作の三身如来となることを明かされているのであります。

さて、先程も言ったように、一心三観、一念三千の観念・観法である天台大師の天真独朗の法門は、上根上機じょうこんじょうきの行法でありまして、像法時代にこそ有用でありましたけれども、末法の時代には無益むやくであります。そのことを『十八円満抄』に、

「所詮末法しよせんに入つては天真独朗の法門無益なり。助行には用ふべきなり。正行には唯ただ南無妙法蓮華経なり（中略）末法に入つて天真独朗の法を弘めて正行と為さん者は、必ず無間大城むけんに墮ちんこと疑ひ無し」（同 一五一八頁）

と仰せになっているのであります。

そして、本抄において「信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華経と唱へ奉れば凡身即ち仏身なり。是を天真独朗の即身成仏と名づく」とおっしゃっておるのは、天真独朗・不思議実理の止観の本体は、まさに三大秘法の南無妙法蓮華経にあるとして、このように釈せられているわけであります。すなわち、大聖人様の仏法から言うならば、天真独朗の即身成仏とは、三大秘法の御本尊を受持し、南無妙法蓮華経と題目を唱えて自行化他の修行に励むことによって、衆生が凡夫の身を改めることなく、そのまま仏の身と成る、つまり即身成仏することができるということであります。

まさに、これが一切衆生救済の秘法たる大聖人様の本因下種の仏法であり、我々一人ひとりが成仏していく上において極めて大事な御法門であることを知るべきであります。そして末法は、この大聖人様の仏法をもって、一切衆生がことごとく救われていくのです。

このことを申しまして、講義は一往これで終了いたします。

最後に、皆さん方にお願ひがあります。

それは今、宗門は、御承知の通り平成三十三年・法華講員八十万人體勢の構築を目指して、皆さん本当に、折伏に頑張っているらしいです。しかし、去年あたりの活動状況を見ますと、やはりもう一つ、私達はさらにしっかり異体同心して戦っていかなければならないのではないかと感じるのです。

皆さん方も周囲の状況を御覧になって、色々なことを感じられているかと思えますけれども、やはり折伏したあと、しっかりと育成をしていかなければならないのです。

折伏と育成というのは、共に化他行であります。ですから、折伏をしたままで放っておいたら、結局、元の本阿弥^{もくあみ}で、その人を本当に救うことはできません。だから、折伏と育成の両面をきっちり行って、我々の目指す八十万人体勢をしっかりと構築していかなければならないのです。

その一つのパロメーターと言えるのが、御講の参詣です。新しく信心を始めた人を、御講に参詣させるということが大事なのです。だから、折伏をした人を、折伏しっぱなしにするのではなく、次の御講には必ずお誘いする。そうやって一つひとつ育成していく必要があると思えます。

これは、一人では行うのが難しいときがあります。ですから、講中がよく相談をして、育成係のような機関を作ってもいいと思えますし、また折伏した人が責任を持って必ず御講に参詣させ、さらに総本山へ御登山して御戒壇様にお目通りさせるというように、折伏したら育成をして、その方が折伏できるまで、きちんと育てていくことが極めて大事であります。

数の上では、折伏して成果が上がったとは言っても、実際に蓋^{ふた}を開けてみたら、全く昔と変わりませんでは、いけません。

このことは、皆さん方一人ひとりが、そしてまた講中がしっかりと考え、折伏と育成は両方とも化他行であるから、折伏だけではだめで、育成もしっかりしていくことを心して、是非とも折伏に頑張ってくださいたいと思えます。

そして、平成三十三年には一人ひとりが本当に歓喜に燃えて御登山できるようにしていただきたいと思う次第でありますので、どうぞよろしく願いいたします。

以上をもちまして、私の講義を終了いたします。